

常陸大宮市史編さんだより Vol.6



茨城大学人文学部准教授 添田 仁委員（近世史部会長）

このたび市史編さん委員会に加えていただいた添田です。主に江戸時代の歴史を担当します。よろしくお願いします。

八溝山系の山々と木々、そして那珂川・久慈川がたえる水の流れに囲まれた常陸大宮市。豊かな自然、それも常陸大宮市の個性の一つです。この季節は、湯気が立つけんちん蕎麦を地産の日本酒と一緒に流し込んで、自然がもたらしてくれる恵みを堪能する方も多いでしょう。私もその一人です。

私たちの生活が、多かれ少なかれ自然の条件を基礎にして成り立っていることはいうまでもないでしょう。

江戸時代は今と比べて、人間がより自然を身近に感じていた時代といえるでしょう。

市域で暮らした人びとの生活も、自然の恵みなしには成り立ちませんでした。西の内紙の材料となる楮、諸沢や下小瀬の火打石、高部の材木、諸沢の粉こんにゃくなどが、水戸藩のふところを温めました。山や川の資源を大切に活用するしくみが地域のなりわいを支えたのです。一方で、永田茂衛門親子によって那珂川・久慈川に築かれた巨大な灌漑施設（堰）が下流域を有数の田園地帯に変えたように、人間が自然の力を操るための技術も進歩しました。



▲大正期の辰ノ口堰と瀬割堤
（『水戸藩利水史料集』より転載）



▲幕末期の辰ノ口堰元付近『辰ノ口分江全図』
（『水戸藩利水史料集』より転載）

そして、ときに行き過ぎた開発が、土砂くずれ、洪水、獣害のような災害となって人びとの生活と命を脅かし始めたのです。

近年日本列島で頻発している自然災害は、自然と人間社会との関係をどのように考えるべきなのか、私たちに重い問いを突きつけているように思います。江戸時代の歴史には、近代以降の社会が忘れてしまった、自然と人間のつき合い方のヒントが刻まれているのではないのでしょうか。新しい市史では、自然と人間の歩みを別々に把握するのではなく、自然と人間が織りなす歴史を描くことに力を注ぎたいと考えています。

■問い合わせ■ 歴史文化振興室 ☎52 - 1450